

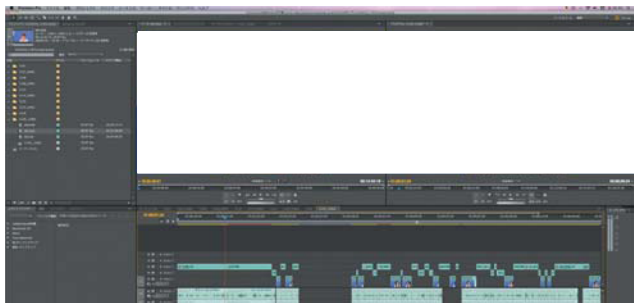
# アドビCS5 Production Premium導入事例レポート

## ロボット 編集室3室をリニューアル

### フォーマット変換不要で効率化 素材のクオリティ最後まで保持



新編集室の作業環境



Adobe Premiere ProによるLISMOチャンネル編集

ロボット(東京都渋谷区)は、CMをはじめ映画やアニメーション、ウェブサイトなど、多岐にわたる制作を手掛ける大手プロダクションだ。同社は、さらなる効率性とクオリティの向上を目指し、10月に編集室3室をリニューアルした。その編集室でコアとなるシステムは、アドビシステムズ製Adobe Creative Suite 5 Production Premium(以下、CS5プロダクションプレミアム)を搭載している。CS5プロダクションプレミアムは、編集ソフト「プレミアプロCS5」や、モーショングラフィックソフト「アフターエフェクツCS5」、音声編集ソフト「サウンドブースCS5」、モニタリングソフト「オンロケーションCS5」、DVDオーサリングソフト「アンコールCS5」、インタラクティブオーサリングツール「フラッシュプロフェッショナルCS5」などが同梱されているオールインワンパッケージ。デスクトップ上でトータルソリューションを提供する。

## 新たな制作ワークフローを構築

製品を多用した更新となった」と話す。3室の各編集室には、ウィンドウズとMac対応の2台のマシンが配置されており、それぞれにCS5プロダクションプレミアムがインストールされている。全マシンには、8テラバイトのローカルストレージを搭載。さらに、ネットワークを經由して各編集室間で共有するセントラルストレージも配置した。



鴨川氏



板倉氏

さまざまな記録フォーマットが存在し、それを編集ソフトに取り込むためのフォーマット変換に1日を費やすこともある。この時間が短縮されたことは、非常に大きな利点となる(鴨川氏)と強調した。プレミアプロCS5は、P2、XDCAM EX、XDCAM HD、AVCHD、XDCAM HD4

22、AVCCAM、DPX、AVCイントラ、RED R3D、さらにキヤノンやニコンのデジタル一眼レフカメラフォーマットとほぼすべてのフォーマットにネイティブ対応している。鴨川氏は「このほか、プレミアプロCS5に搭載しているMercury Playback Engineは、64bitやGPUアクセラレーションに対応している。マシンの能力を最大限に生かしてくれる。時代のニーズに沿ったアドビの製品開発スピードにも安心感が持てる」と話す。

新編集室で手掛けた日立製作所の企業CMは、撮影制作のEOS 7DにキヤノンのEOS 7Dを2機使用。30秒CMとエプソンムービーを制作した。現場には、プレミアプロCS5をインストールしたMacBook Proを持ち込み、撮影した素材をそのまま取り込んで確認。その素材を現場でディスク2台にコピーして編集室に持ち込み、フォーマット変換を行わずに作業を始めた。担当ディレクターの板倉氏は、プレミアプロを実作品で操作するのは今回が初めてだったという。「ほかの編集ソフトを使っていたが、プレミアプロCS5は操作性もよく、すぐにCS5に介してプレミアプロが行われ、セントラルストレージを介してプレミアプロCS5での編集とアフターエフェクツCS5での修正作業のやり取りがスムーズ

その工程を必要とせずに行われたという。板倉氏は、アドビ製品間のシームレスな稼働する点も称賛している。鴨川氏は、「素材のフォーマットのまま、編集、合成、そしてカラーグレーディングまで一貫して行える効率よいワークフローが確立できた。これらの工程でフォーマットの変換がないということは、素材のクオリティを最後まで保持できることにつながる。新編集室は、効率性かつクオリティの向上を実現した成功例と言えるだろう」と語っている。

エックCS5を活用する。合成した映像は、テロップ挿入のオンライン編集に持ち込み、MA処理をする。それが終わると、さらに「それが終わると、さらに撮影からデータで制作フローを意図している。撮影にはパナソニックのAVCCAMやP2、AG-HV Xシリーズ、ドラマにはキヤノンのEOS 7Dなどのカメラを使用し、1920x1080ピクセルのフルHDサイズでマスター素材を確保しておく。LISMOチャンネルのコンテンツ制作ワークフローにおいては、各ディレクターがさまざまな編集環境にあり、ツール間を行き交うための中間ファイルを作成しなければならないという非効率な面があるという。作業効率アップに向けて、アドビ製品の進化に期待が寄せられる。

今回のリニューアルについて、ロボット・管理本部経営企画担当情報システム担当の鴨川弘樹氏は、「既存の編集室の設備が老朽化し始め、今後につながる新しい取り組みが何かできないかと考えていた。2009年11月には、アドビシステムズと提携し、次世代映像制作におけるワークフローの開発などで協力。それにより、アドビ製品の利点を十分に理解できた。その経験が生かされ、同社

この新編集室により、ロボットは高効率のデジタル制作ワークフローを構築する。新たなワークフローでの最大のポイントは、プレミアプロCS5の機能により、取り込みの際、どのようなメディアでもフォーマットの変換を一切する必要がない点だ。カメラには

LISMOチャンネルは、業務用インタラクティブコンテンツ部は、au携帯電話向けコンテンツサービスの中で主力となっている「LISMOチャンネル」の制作を担当する。

LISMOチャンネルは、「MUSIC」「VIDEO」「BOOK」の3つのカテゴリで構成。「MUSIC」は着うたの新譜情報やランキンク、ミュージックビデオやアーティストのインタビューを配信。「VIDEO」は篠田麻里子がナビゲートする映像情報バラエティやオリジナルドラマを配信する。今後は、劇場上映映画とのチケット販売連携やアニメ、映画作品のVODやCATV等との他映像サービス連携を展開

する予定。また、「BOOK」は書籍情報や携帯で読める電子書籍、オンラインブックストアなどとなっている。LISMOチャンネルには豊富なコンテンツが盛り込まれている。インタラクティブコンテンツ部長である日下部雅彦氏は、「当社では、携帯電話の3Gが発展し始めた03年に、新しいメディア展開に向けたノウハウを蓄積するため、自社コンテンツなど、携帯電話向けソフト

ト事業に取り組み始めた。当時と比べて、現在、携帯電話のスペックや容量アップで、さらに豊富なコンテンツ提供が可能となった。09年からは、携帯電話向けコンテンツの撮影にもHDを採用している。「LISMOチャンネル」については、前身となった番組を含めれば、03年より企画立案から、番組の制作、関連するP2C/携帯電話用のサイト作成・運用にプロモーションを含めトータル的に担当している。さらに、「VIDEO」で配信されるオリジナルドラマは、劇場映画

ワークフローについて次のように説明する(3氏の発言)。「さまざまなプラットフォームに展開することを前提に、どの番組も撮影からデータで制作フローを意図している。撮影にはパナソニックのAVCCAMやP2、AG-HV Xシリーズ、ドラマにはキヤノンのEOS 7Dなどのカメラを使用し、1920x1080ピクセルのフルHDサイズでマスター素材を確保しておく。LISMOチャンネルのコンテンツ制作ワークフローにおいては、各ディレクターがさまざまな編集環境にあり、ツール間を行き交うための中間ファイルを作成しなければならないという非効率な面があるという。作業効率アップに向けて、アドビ製品の進化に期待が寄せられる。

ワークフローについて次のように説明する(3氏の発言)。「さまざまなプラットフォームに展開することを前提に、どの番組も撮影からデータで制作フローを意図している。撮影にはパナソニックのAVCCAMやP2、AG-HV Xシリーズ、ドラマにはキヤノンのEOS 7Dなどのカメラを使用し、1920x1080ピクセルのフルHDサイズでマスター素材を確保しておく。LISMOチャンネルのコンテンツ制作ワークフローにおいては、各ディレクターがさまざまな編集環境にあり、ツール間を行き交うための中間ファイルを作成しなければならないという非効率な面があるという。作業効率アップに向けて、アドビ製品の進化に期待が寄せられる。



(左から) 稲川氏、本間氏、横原氏

コンテンツの更新は週2回で、「MUSIC」が水・土曜日、「VIDEO」として制作を担当している。コンテンツの更新は週2回で、「MUSIC」が水・土曜日、「VIDEO」として制作を担当している。コンテンツの更新は週2回で、「MUSIC」が水・土曜日、「VIDEO」として制作を担当している。

### コンテンツはHDで撮影

### 多様なプラットフォーム展開も

コンテンツの更新は週2回で、「MUSIC」が水・土曜日、「VIDEO」として制作を担当している。

ムは、ディレクター・稲川亮輔、制作・本間謙治、エンジニア・横原和の各氏をはじめとした10人ほどのスタッフだ。ディレクターの稲川氏、キャスターをフルバック撮影し、背景と合成するという映像に取り組んでいる。その際には、アフターエ